http://grimreaper.is-mine.net/

薔薇の鍵
バラ　カギ

著：射月アキラ

http://grimreaper.is-mine.net/

01.ブラッディ・ダイヤモンド

小さな開錠音が聞こえて、青年は長く息を吐きながら手を止めた。
時間にすればわずか数分ではあるが、細かい作業を敵地で行うというのはそれなりに精神力を削られる。とくにダイヤル式の金庫を開けるときには神経を使うのだが、のんびりしている暇はない。重い扉を手早く開いて、中身を確認する。
金庫に収まっていたのは、小粒ではあるが数の多いダイヤモンドだった。ブリリアントカットが施されているせいか、わずかな光しか差しこんでいないのに金庫内部が明るく見えてくるほどの輝きを放っている。
冷や汗で滑る黒ぶち眼鏡のブリッジを押しあげ、青年はダイヤモンドを乱暴に掴みとる。小さいが上質な布袋に流し込み、口を堅く縛ると上着のポケットに入れて立ちあがった。
金庫のある部屋は、少し豪華な事務室を思わせる内装だった。古風なミントグリーンの壁紙に、オーク材の床板と大きなデスク。どこか使い古した感のある家具類に囲まれている中で、ダイヤモンドが入っていた金庫だけが妙に新しい。
それもそのはずで、事務所のような社長室を有するこの宝飾品デザイン会社はペーパーカンパニーに近い。突然宝飾品業界に手を出した貿易会社を親会社に持っているあたり、怪しまれても仕方がないし怪しまれるだけのことは行っている。
青年が手に入れたダイヤモンドは、本来この国に流れるべきものではなかったのだ。
「ブラッディ・ダイヤモンド……って言うんだっけか」
ポケットの上から袋を叩きながら、青年が呟く。
ペイント弾で目を潰された監視カメラを横目に開いたままの窓に歩み寄り、身軽さを感じさせる動作で窓枠に足を乗せる。そのまま窓枠に立って建物の外側へ身を乗り出し、窓のすぐ上にある屋根のふちに手をかけた。懸垂の要領で、屋根の上へ。それなりの傾斜はあるが危なげなく立ちあがる。
青年がいるのは、この辺りでは特に古い建物の並ぶ一帯だった。といってもさびれた様子はほとんどなく、中世の風景が残る石造りの通りは観光名所にもなるような場所だ。昔ながらのレトロな街灯が残っている辺りは夜になっても

http://grimreaper.is-mine.net/

人通りが絶えないが、青年のいる建物周辺は近代的な電灯となっているために観光にはあまり適さない。加えて、零時をすぎた深夜帯であることも、青年を目撃する人間がいない原因になっていた。

しかし、古典的な風景が広がるのも、人通りが少ないのもこの一帯だけ。電車で一駅分の距離もないほど近い場所には、近代的な百貨店や飲食店の立ち並ぶ繁華街、レジャー施設の集まる歓楽街がある。電飾で彩られた街は、周囲の暗さもあって浮いているようにも見えた。その向こうには、さらに背の高い超高層ビルの並ぶオフィス街がある。

青年は街から目を反らし、屋根の上を慎重に歩く。建物に外付けされた階段を降りて細い路地を走れば、すぐ近くで仲間のワンボックスが待機していた。中から開けられた後部座席のスライドドアに青年が滑り込むと、ワンボックスはすぐさま発進する。

シートに座りこんだ青年が一息つくと、隣に座る男が窓の外へ目を向けながら短く問う。

「どうだった」

「アタリでしたよ。小粒だけどダイヤばっかりたくさん。他の宝石類はありませんでした」

報告と共に二人の間に置かれた小さな袋を一瞥して、男は無表情のまま前に向き直る。街灯に照らされた男の右腕は、木製の銃身を持つ猟銃を抱えていた。侵入の際、障害となりかねなかった警備員を催眠弾で眠らせ、ペイント弾でカメラを潰した銃だ。

狙撃手として活動している男は、常に表情を動かさない。ただ、青年は、こういった「仕事」が終わるとき、男のまとう空気が少し柔らかくなるような気がしていた。

「ローザの鍵ともなれば、このくらいは余裕だったか？　キース」

「まさか……いつだって緊張しますよ」

汗をぬぐいながら言った青年の笑顔は、少しだけひきつっていた。

「おかえりなさい」

青年・キースがワンボックスから降りると、少し高い位置から女の声が投げかけられた。

ここは、さきほど盗みを働いた偽デザイン会社よりもさらに大通りから離れ

http://grimreaper.is-mine.net/

た旧市街。一方通行の道が多く、窮屈な印象を与える住宅街の片隅だ。
声の主である女は、階段を数段のぼった先、キースが入ろうとしていた家の玄関前に立っていた。肩を出したワンピースはふとももの半ばまでしか覆っていない。すらりとのびた脚は編み上げのブーツが包み、上品さのある上半身とは裏腹に活動的な印象を与える。
胸までの金髪をかきあげ、不敵な笑みを浮かべる女の名はローザ。
服装さえ相応のものを着れば夜会に出ていてもおかしくはない容姿に似合わず、彼女の正体は神出鬼没な大怪盗。キースと、その後ろから降りてきた狙撃手・サイラス、走り去ったワンボックスの運転手をはじめ、五十を越える手下たちを抱える怪盗団のトップだ。
誰でも写真を撮ることができ、監視カメラが当たり前になったこの時代。いまだにローザの姿が記録されていないのは、もはや異常だ。目撃者の証言だけが独り歩きしてうわさが誇張されていくのを、楽しんでいる余裕すらある。
「目当てのものはあった？」
笑みを崩さずに問うローザに、キースは手に持った袋を渡す。
中身を確かめたローザの顔がさらに笑むのを見て、キースはようやく緊張から解放される。どころか、緊張感のかけらもない、だらしない表情になりそうになるのをこらえる努力を強いられる。
ピッキングを極めるだけでこの女の笑みを見られるのなら、犯罪者になることだって惜しくはない。
「ご苦労様。それじゃ、中に入りましょうか。ちょうどこのダイヤに関わる情報が入ってきたところなのよ」
そう言ってローザは背後の扉を開き、キースとサイラスが後に続く。
淡い紫を基調とした内装はどこか怪しげな雰囲気を放っていた。うっすらと壁紙に描かれたバラの柄も、日に焼けた床板も、どこか古臭さを感じさせる。唯一、要所に取り付けられた間接照明だけが真新しい。
しばらくはローザが歩むたびに鳴るヒールの音だけが廊下に響き、誰も一言も発さない時間がすぎる。廊下を進み、階段をのぼり、さらに突き当りの部屋へたどり着くと、ようやくローザが口を開いた。
「今回の相手は、少し大きいわよ」
大胆不敵な怪盗の口調は揺るがない。
むしろ楽しげに言ってのけたローザは、立ち止まることなく扉を開けて部屋の中に滑り込んだ。

http://grimreaper.is-mine.net/

部屋には、様々な種類の棚が並んでいた。宝石や装飾具などの収まる薄い箱。ガラスケースの中には骨董品、棚の隙間から見える壁には絵画が詰め込まれている。

怪盗ローザのコレクションルーム。その中に、今日盗まれたダイヤモンドも収まることになる。

棚に並んだ小箱の一つを取り出して、ローザはその中にダイヤモンドを流し込んだ。甕から甕へと水を移す「節制」のタロットカードの美しさを思い出しながら、キースは簡潔に問う。

「繋がったんですか？」

ダイヤモンドを注視していた紫紺の瞳が、一瞬だけキースを向いた。

それだけでキースの気持ちは小躍りしそうなほどに舞い上がっているのだが、顎を引いてなんとかこらえる。

「ええ」

短く答えたローザが、小箱の蓋をパタンと閉める。

「最近子会社……というよりはペーパーカンパニーを増やしていると言った方が正しいけど、そういう小細工をしているのは、やっぱり密輸品が多いからだったわ。こっちにいるマドンナ側は情報の隠し方がうまかったけど、相手の方はそうでもなかったわね」

ローザは小箱を棚に戻し、キースとサイラスに向き直って続けた。

「密輸相手はウェルスバンク。統治能力は内戦でボロボロ、ダイヤモンドをはじめとした鉱山の利権を狙って大国が政府と反政府に分かれて投資する、代理戦争みたいな状況になり始めている国よ。貿易会社マドンナが投資したのは反政府側ね」

細かい部分はそっちの方が知ってるんじゃないかしら、とローザは付け足すように問いかけたが、サイラスは表情すら変えずに沈黙をたもつ。

最初から単なる確認のつもりだったのか、ローザは特に気分を害した様子もなく身をひるがえす。コレクションルーム内の唯一の窓へと近づき、木枠に手をかけた。

狭苦しい街の中では、窓の外に見えるのも隣家程度のものだ。しかし、ローザの視線は目の前のレンガ壁を通り過ぎ、その向こうにある乱立した摩天楼を捉えている。

「全ては無理かもしれないけれど、払える悪があるなら払ってあげないとね」

ちょうどその方向に、貿易会社マドンナの本社ビルが建っていた。

http://grimreaper.is-mine.net/

02.マドンナの秘密

高さ三二〇メートル。
階数七七。
エレベーターの数は三〇を越え、務める従業員は数えきれないほどいるが、警備員の数ならばローザによって暴かれていた。
「二〇人、ですか」
確認するように言って、キースは眉を寄せる。前に立つローザとサイラスの背によってビルの根元は見えないが、おそらく二人の視線の先には巡回中の警備員がいるはずだった。
「この大きさで二〇人、と考えると少なく見えるけど、その分機械的なセキュリティがあるはずよ。……搬入口は簡単な鍵みたいだけれど」
ローザは応えて、目前まで迫った超高層ビルを仰いだ。
七〇階程度の高さまでは、ガラス張りの四角柱。それ以上の高さは、削られた鉛筆のような円錐型だった。最上階から上は尖塔が生え、ビルは摩天楼にふさわしいほど高く伸びている。
貿易会社マドンナが建設した本社ビル。
ビューティフル・ワールド・ビルディングに施された装飾は、「誰にも盗めない宝石」とまで言われている――のだが。
「ナンセンスね。汚いマネをしながら、美しき世界なんて」
ネーミングセンスに関しては、キースもローザの言葉を否定することはできなかった。
吐き捨てるように言ったローザは、地上へと目を戻す。キースの位置からは見えない警備員に視線を向けて、傍らの男に問う。
「どう、サイラス」
「装備はいい。裕福な人間が好みそうな最新式だ。全て新品。――しかし、使われた形跡がほとんどない。着る人間は脅威ではないな。確かなのは見える範囲だけだが」
サイラスの返答は、最初から言葉を用意してあったのではないかと思わせるほどよどみない。
彼の手には先日も使用していた猟銃。こちらには催眠弾が装填されており、カメラを潰すためのペイント弾は腰の拳銃に収まっていた。

http://grimreaper.is-mine.net/

ビルに軽く視線を向け、
「しばらく見ていれば警備の穴も突けるが」
「いえ、手早く済ませましょう。長引かせた方が危険だわ」
「了解」
サイラスは短く応えて猟銃を構える。発砲音は、銃口にとりつけられた隠密用の消音器に吸収されて霧散。催眠弾はビルの根元にいる警備員に命中してその意識を奪う。
装填と発砲が繰り返され、視界に入る警備員は全て地面に崩れ落ちた。装備品がこすれ合う音が辺りに響くが、気付いたものはいないらしい。
目立った動きがないのを確認して、ローザが、続いてキースとサイラスがビルへと近づく。サイラスが眠っている警備兵を確認している間に、キースがビルの搬入口を開錠。
侵入の手筈が整う。
「あっけないですね……怖いくらいに」
音も立てずに開いた扉を前に、キースが呟いた。両手に持ったピッキング用の工具をしまいこんで振り返ると、ローザが頬に手を当てて佇んでいた。
何かを考えている風ではあったが、時間に余裕があるわけではない。他の警備員が巡回でまわってくる可能性もある――と、胸中で言い訳してから、キースは恐る恐る声をかける。
「ローザ？」
「……ごめんなさい。気にしてる暇はなかったわね」
歩き始めたローザに、「何を」と問いかけることはできなかった。
代わりに、ビルに入りかけたローザが振り返ってキースとサイラスに声をかける。
「見張り、中に入れておいた方がいいわね。お願いしていいかしら？」
キースが頼みを断ることはできなかった。

搬入口の先にあった小さな事務室に警備員を引きずり込み、扉を施錠してから奥へと進む。廊下に出ると、非常時用の間接照明が足元を照らしていた。
音はない。警備員の巡回は、屋外がある分、屋内の頻度が低いらしい。
ここから先、脅威となるのは監視カメラだけになる。
「サイラス、先導お願い。カメラがあったら潰していって」

http://grimreaper.is-mine.net/

「さすがに気付かれるんじゃないのか？」
「これだけ広ければ、確認作業を怠ってしまっても仕方ないんじゃないかしら？　元々、練度は低いみたいだし」
「なるほど」
短く応え、サイラスはするりと扉を潜りぬける。
空気の抜けるような発砲音が数回してから、扉が大きく開いた。
先を進むサイラスに続いて、ローザ、キースが廊下を進む。化学繊維のじゅうたんが床を埋めているため、三人の足音はほとんど消えている。一定の距離を進むごとに聞こえる銃声以外は沈黙が保たれていた。
非常時用の扉を開き、普段は使われない階段を上りはじめると、監視カメラがない代わりにじゅうたんがなくなって足音が大きくなるようになる。発生する音を最小限に抑えながら長い階段を無言でのぼる。地味ではあるが、最も確実で見つかりにくい方法だった。
七七階ぶんの階段をのぼり、扉を開けると、エレベーターホールに敷かれていたじゅうたんは上質な毛の長いものだった。昼間には秘書が控えているであろうカウンターの間を通り抜ければ、そこがマドンナの社長室だ。
見るからに重厚な木製の扉が行く手を塞いでいる。
ローザに促され、キースは息を整えながら社長室の扉へと向かう。上着から工具を取り出し、鍵穴に刺せばそのあとは指先に集中するだけの作業が続く。
細かい金属音だけが鳴る、静かな時間が数分ほどすぎたところで、
「キース、落ち着いて聞いて」
硬い声が、背後から投げかけられた。
ローザの声に反応することができないことにいら立つが、キースはなんとかこらえて作業を続ける。
「エレベーターが動いてるわ。上に来てる」
わずかに手元が狂った。慌てて元の位置に戻し、さらに指先に集中する。
背後は見えないが、エレベーターの扉上部にある階数表示はよどみなく進んでいるはずだった。サイラスが銃の安全装置を外す音がする。指先に神経が集中する。ピッキングツールから感じるわずかな振動から内部構造を読み取り――

リン、と甲高い電子音が鳴った。

http://grimreaper.is-mine.net/

エレベーターが到着したことを知らせる音は、大きくはないものの静寂に包まれたエレベーターホールにはよく響く。

金属が擦れる音が、警備員の歩みと同じリズムで鳴り、三歩目で止まる。二言三言の会話が交わされたのち、金属音はもう一度三回鳴って、

――リン、と電子音が響くと同時、キースは止めていた息をようやく吐き出した。

隣に立つローザも一息つき、サイラスは無表情のまま安全装置をつけなおす。

「間に合わないかと思ったわ……」

キースには謝る余裕もない。

彼らの背後には開錠したままの木製扉があった。鍵が開いてからエレベーターが到着するまでに三〇秒。エレベーターから降りた巡回の警備員が社長室の扉を開けようとしなかったという幸運もあり、間一髪、相手に見つかることは免れたといったところだ。

もし、巡回警備員が扉を開けようとしていたら――戦力に数えられるのはサイラスだけ。ローザはナイフの扱いに長けているものの、銃を相手に立ちまわれるとは言えず、キースに至ってはピッキングでしか活躍できないために足手まといにしかならない。

圧倒的な戦力不足。とはいえその原因は、ローザ自身が「人殺しはしない」という主義を持っているからなのだが。

「もらうものをもらって、はやく帰りましょう。また巡回が来たらたまらないわ」

内側から扉に鍵をかけなおし、ローザはうんざりした口調で言った。

一刻もはやく抜け出したいのはキースも同様なので、目当てのものを探して室内を見まわす。

扉の正面には、二つのモニターが並ぶ大きなデスクが鎮座していた。円錐形の構造をしているため、壁はわずかに傾斜していて天井も床より狭い。壁の傾斜に合わせ、三方向にある窓の形も台形に近いものになっていた。超高層に位置しているため、差しこんでくる明かりは月光のみ。地上から見るよりも空が広い。

重要な書類――というよりは、隠すべき書類が入っていそうな金庫は、デスクの足元、板を一枚外した場所に収まっていた。

http://grimreaper.is-mine.net/

ダイヤル式の金庫を前に、キースは一度こめかみを揉んでからしゃがみこむ。開錠に必要な数字は五桁。聴覚と触覚だけを頼りに、特定の数字を見つけ出さなければならない。

大物を相手にしているのだから仕方のないことなのだが、さすがに連戦は厳しいものがあった。

「それにしても――なんだかアンバランスですね」

ダイヤルを回しながら、キースは呟いた。

一桁目はすぐに判明。

「なにが？」

控えめに問うローザは、聴覚に集中する作業を気づかっているのだろうか。

二桁目に目星をつけながら、キースが答える。

「警備員の装備は最新型なんですよね。でも、鍵の方はそうでもなくて……電子錠とか、生体認証とか、なかったじゃないですか」

言いながら、二桁目を確定。三桁目のダイヤルを回し始める。

ローザは何も言わない。サイラスも黙ったままだ。

「……えーっと、僕なにか妙なこと言ってます？」

「いいえ」

否定の言葉は速かった。

囁くような、それでいて堂々としたローザの声が続く。

「内戦時に使用される武器の話になるけれど、政府側はともかくとして反政府側の質は基本的に悪いわ。そういうときに他国が絡んでくると、良質だったり最新式だったりする武器が流れていくんだけど、今回の場合」

キースはローザの言葉を頭に入れながら、開錠の作業を続ける。

三桁目、判明。

「マドンナが行っていたと考えられるのは、ウェルスバンクの反政府組織からの紛争ダイヤモンドの輸入。つまりは反政府組織へ外貨を提供する金銭的援助だったわけだけれど――ここから先は仮定の話よ。もし、マドンナが宝石以外の貿易にも手を出していたら。もし、武器の取引に手を出していたら。もし、外貨の代わりに武器の援助を行っていたら。もし、本社の警備員にあまりものを持たせて、私兵のように扱っていたら」

キースの頬を汗が伝う。

宝飾と武器。一見もっとも遠い場所にあると思える二つだが、需要と供給という意味ではこれほどバランスの取れたものはない。紛争地帯は武器を求めて

http://grimreaper.is-mine.net/

鉱脈を探し出し、平和な場所で着飾る人間は宝石を求める。武器の開発には戦争が不可欠だが、同時に裕福でなければ新しいものに手を付ける余裕がない。
マドンナが安価な宝石を求め、武器の密輸に手を出したとしても、決して突飛な話ではない。
金庫に隠された闇が、途方もなく深いもののような気がして、キースは止まろうとする指を必死で動かす。
後悔しても、もう遅い。残りは二桁。引き返すことなどできはしない。
「――サイラス？」
不意に、ローザが声をあげた。
デスクの下にもぐりこんでいるキースからはうかがい見ることはできないが、ローザが移動しているような音だけが聞こえてくる。
もどかしい気持ちのままダイヤルを回し、かちりと音がしたところで止める。四桁目が判明した。
残りは一桁。それもすぐに見つかる――はずだったのだが。
「ヘリが近づいて来ている」
サイラスの平坦な声に、キースの肩が跳ねた。
耳をすませてみれば、確かにヘリコプター特有のローター音が聞こえる。近づかれる前に五桁目を見つけなければ、と焦る心が集中力を乱し、すぐに見つけられるはずの数字が見つからない。
「軍事用ではない、が……武装した人間が乗っている。窓から離れろ」
サイラスの指示はローザに向けられたものだろう。キースはデスクの下にしゃがみこんだまま五桁目を見つけるまで動けず、背後には窓がある。
そちら側に回りこまれたら、終わりだ。
「応戦できる？」
「最善は尽くす。――来るぞ、伏せろ」
会話の直後、何百と吐き出された弾丸が窓ガラスを突き破って室内へとなだれ込んだ。
応接用と思しきガラステーブルは破壊され、ソファには弾丸が突き刺さり、床に散らばったガラスはどこから飛んできたものなのかも分からない。幾重にも響く破砕音に妨害され、キースはたまらずにダイヤルから手を離した。
デスクに手をかけ、姿勢を低くしたまま室内を窺う。
「無事ですか⁉」
「生きてるわ。作業を続けてちょうだい。できるだけはやく！」

http://grimreaper.is-mine.net/

ローザの声はソファの後ろから。割れた窓の近くからは、サイラスのものと思われる銃声が聞こえてくる。ここまで来れば隠密行動に意味はないためか、威力を軽減させるだけの消音器は取り外したようだった。

キースは再びデスクの下へ。かすかな振動を頼りに五桁目を探す。

ローター音と銃声、焦げ臭いにおいが部屋にむせ返る。キースは半ば無意識に目を閉じて、意識を指先だけに向ける。〇から九までの数字をひとつひとつ確認し――かちり、と確かな手ごたえが返ってきたところで目を開けた。

集中により遮断されていた音が戻る。金庫の取っ手にのびていた手は、さらに近づいていたローター音の中から聞こえてきた声によって止まった。

「壁に背をつけろ！」

サイラスの声が飛ぶ。思わず振り返ったキースの視線の先、窓の向こうには、ヘリの側面、開け放たれた扉が良く見えた。

ヘリの内側にある手すりを掴んだ男が、黒い物体――アサルトライフルをキースへ向けている。

キースの背筋を悪寒が駆け抜けた。死に直面した脳が、視覚情報の処理速度をフルスペックで実行する。普通ならば見えるはずのない、銃の引き金を引く指の動きすら視認する。メインローターの回転数すら数えられそうなスローモーション。

その中で、

「キース！」

ローザの声が、硬直する体を動かした。

時間が元に戻る。脳の処理能力が通常時のそれへ。

キースが転がり込むようにデスクから離れ、壁に近づく。と同時、ヘリに搭乗した男が、トリガーを引き絞った。

連なる銃声。伴って吐き出される弾丸が、キースのいた空間を貫いていく。その内一発が頬を裂いた。転がった勢いそのまま、背中から壁に突撃。呼吸が一瞬止まる。

永遠に続くかと思われた弾幕は、反対側、デスクの向こう側からの一発で呆気なく終わりを告げた。ヘリからの襲撃者を麻酔弾で眠らせたサイラスは、猟銃を放って腰の拳銃を抜き、デスクを乗り越えてヘリのコクピットへ銃口を向ける。

空気の抜けるような銃声が三度。方向転換を図ろうとしていたヘリコプターは、その行動が災いしてコクピットからの視界を半ばほどペイント弾で埋め尽

http://grimreaper.is-mine.net/

くされた。
サイラスは銃をホルスターに収め、足元のキースに目を向ける。
「生きてるか？」
「……なんとか」
去っていくローター音に安心したせいか、脳内麻薬の影響で麻痺していた痛みがキースに戻ってきた。引きつる頬を無視して金庫へ向かい、重い扉を開く。
中に収まっていた書類は、折って上着の内ポケットへ。その間に、ローザはあらかじめ用意しておいたワイヤーを、室内に固定してから割れた窓から落としていた。
サイラスが放り投げた猟銃を広い、キースが立ちあがったところで、ローザは腰のベルトにフックを取り付けてワイヤーを通した。
悲惨な状態になった部屋を見まわして、肩をすくめる。
「社長室がこんな状況じゃあ、証拠なんて盗まなくてもよかったかもしれないわね」
キースは苦笑しか返せなかった。

http://grimreaper.is-mine.net/

03. 正義の味方

――宝飾系貿易会社マドンナに、紛争ダイヤモンド密輸の疑い。
ポストに投げ込まれた新聞の一面には、そんな見出しが書かれていた。
頬に貼られたガーゼを触りながら、キースは家の中に戻りつつ一面にざっと目を通す。
深夜にマドンナの本社で襲撃事件が発生。社長室が破壊される被害にあったが、その日の朝方に新聞社に届いた書類のコピーは、マドンナがウェルスバンクの反政府組織と取引を行った際に書かれた誓約書だった――といった内容が、こまごまとした字で書かれていた。
実際に社長室を襲撃して破壊したのは、おそらくはキースたちを殺そうとしたマドンナ側の人間なのだが……そこまで真相に迫ったマスコミはいないのだろう。
廊下を抜け、リビングルームに入ると、キースは部屋の中央にあるテーブルに新聞を置いた。
「ありがとう」
椅子に座っていたローザが言って、ティーカップをソーサーに戻す。
いつも通りに新聞をめくろうとした手が、ぴたりと止まった。一面の記事に紫紺の瞳が向けられる。そこに、マドンナと反政府組織の繋がりは書かれているものの、ウェルスバンクの内情は記事の隣に軽くまとめられているだけだった。
内乱の発生した、海の向こうの国。たったそれだけで片づけられる人間もいるのだろうが、キースが従う女怪盗ローザはそうではない。大国と大企業の陰謀に巻き込まれた、資源を持つ小国の内乱を、「海の向こう」と言って切り捨てられる人間ではない。
そうでなければ、超高層ビルの最上階まで行って、悪事を暴くことなど誰がするだろうか。
「……怪我は、大丈夫？」
何も気にしていない風に、ローザが問う。
「かすり傷なので。痕は残るかもしれないって言われましたけど」
「感染症には気をつけて」
「はい」

http://grimreaper.is-mine.net/

普段と同じトーンで交わされた会話は、そこで途切れた。
沈黙。その間、何かを思うように新聞の見出しを撫でていた細い指が、唐突に新聞の端を握り締めた。
怪盗団なんてものを立ち上げて、本気で義賊じみたことをやってのけようとする。ローザはそういう人間だった。普通の人生を歩みかけていたキースが、昔かじっていた程度のピッキングを極めて彼女についていこうと思ったのは、彼女が持つ正義感を羨ましいと思ったからだ。
彼女は本気で、『正義の味方』であろうとしている。
ただの怪盗であることを、彼女自身、自覚したまま。
「これで、終わらないわよ」
ローザの瞳は、ウェルスバンクの文字を睨みつけていた。

――彼らが小国にとっての『正義の味方』になるのは、それから三年が経った後である。

〈了〉